

東北学院大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム

数理・DS・AI応用基礎プログラム

2025年度自己点検・評価結果報告

東北学院大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門委員会

自己点検・評価の視点		点検・評価項目	取組と評価	自己評価
学内からの視点				
1	プログラムの履修・修得状況	どれほどの学生がプログラム該当科目を履修・習得しているか <指標> プログラム該当科目の履修者数、修得者数	2025年度より、従来、経済学部及び工学部でのみ開講していた応用基礎プログラムを全学（大学等単位）へ拡大した。 2025年度履修者数は1,950名となり、目標履修者数1,745名に対して目標達成率は100%を超えた。なお、履修者数は認定科目のうち1年次配当科目である「AI社会の基礎」の履修登録学生数を履修者数として用いている。 修得者数については、今年度初めてプログラム修了者がでたが、その数値は19名であった。 「AI社会の基礎」の履修者が、2年次配当科目「データ活用による探究（発展）」及び3年次配当科目「データサイエンス活用の基礎」へも関心を持ち、結果として修了者数が増加する方策について検討していく必要がある。	S
2	学修成果	履修学生がプログラム各要素の知識を身につけているか <指標> 該当科目の「授業改善のための学生アンケート」の学修成果を問う設問の結果	「授業改善のための学生アンケート」における設問6-1（あなたは、この授業によって得られた成果がありましたか。）については、「大いにあった」「ある程度あった」の回答が「AI社会の基礎」では合わせて93.0%（前年度比2.3ポイント減、以下同じ）、「データ活用による探究（発展）」では合わせて98.0%（2.0ポイント減）、「データサイエンス活用の基礎」では合わせて100%を占め、アンケートに回答した学生のうち多くの学生が学修成果を実感している。 同様に、設問6-2（その成果は次のうちどれにあたりますか。）（複数回答）については、「知識の獲得・理解」「技術・技能の習得」の回答が「AI社会の基礎」ではそれぞれ84.5%（5.6ポイント減）、37.6%（9.4ポイント減）、「データ活用による探究（発展）」では83.5%（12.2ポイント減）、67.0%（19.2ポイント増）、「データサイエンス活用の基礎」ではそれぞれ100%、83.3%となり成果の内訳の多くを占めている。 これらのことから、履修学生がプログラム各要素の知識を身につけられたと評価できる。	A
3	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	プログラム該当科目が学生が理解しやすい内容となっているか <指標> 該当科目の「授業改善のための学生アンケート」の理解度を問う設問の結果	「授業改善のための学生アンケート」における設問5（あなたは、この授業の内容を理解できましたか。）について、「AI社会の基礎」では「よく理解できた」「ある程度理解できた」を合わせた回答が全体の95.4%（前年度比0.1ポイント増、以下同じ）を、「データ活用による探究（発展）」では全体の97.1%（5.8ポイント増）を、「データサイエンス活用の基礎」では100%を占めており、理解できたと評価する学生が大半を占めるという結果だった。 このアンケート結果より、プログラム該当科目が学生が理解しやすい内容となっていると同時に、学生が十分に内容を理解していることが確認でき、目標を達成できたと評価できる。	A
4	学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	プログラム修了が学生にとって他の学生に推奨できるものとなっているか <指標> 該当科目の「授業改善のための学生アンケート」の満足度を問う設問の結果	「授業改善のための学生アンケート」における設問1（この授業を総合評価してください。）の結果のうち、「たいへん良い授業だった」「どちらかといえば良い授業だった」を合わせた回答が「AI社会の基礎」では89.9%（前年度比1.1ポイント減、以下同じ）、「データ活用による探究（発展）」では97.1%（2.9ポイント減）、「データサイエンス活用の基礎」では83.3%を占め、満足度の高い授業となっていることが確認できた。このことから、他の学生への推奨度についても一定程度の評価が可能であると判断した。 ただし、外部評価における指摘事項にあったように、今後も継続的に本プログラムの改善を図るためには、他の学生への推奨度を直接的に測ることのできる指標を設定することが望ましい。	A
5	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	プログラム履修者数、履修率向上に向けた取り組みが図られているか <指標> 履修者増加を図る取り組みの状況	2025年度の取組としては、前年度から引き続き本学webサイトを用いて学生への周知を図ったほか、認定科目の授業冒頭で本プログラムの紹介を行うなどの取組を実施した。 なお、2026年3月13日に開催された専門委員会（2025年度第4回）において、「2026年度のプログラムの周知（案）について」が審議され、6つの取組を実施することが承認された。承認結果に基づき、2026年3月から4月にかけて、2026年度の履修者数増加に向けた取組を実施した。 2025年度においては、履修者数が目標履修者数を超過していることから、次年度以降も継続して同様の取組を実施していくことが望まれる。	A
学外からの視点				
6	プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	プログラム修了者がどのような進路を選び、プログラムで身につけたことを活用できているか <指標> プログラム修了者の進路・就職先と、進路・就職先でのプログラム修了者の評価	2025年度に初めてプログラム修了者がでたものの、プログラムを修了し卒業した学生はまだ輩出されていないため、プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価については評価不能である。 なお、卒業生アンケート（卒業後3年調査）に評価指標となる設問を新たに盛り込むことについては、外部評価において期待も述べられており、本プログラムを修了して卒業する学生が調査対象となる2030年度までに、継続して検討を進めていく必要がある。	E
7	学術・自治体・産業界からの視点を含めたプログラム内容・手法等への意見	プログラムの内容が学術・自治体・産業界に求められる学修成果を学生に身につけさせられる内容となっているか <指標> 外部評価委員による客観的な評価、学外者からのヒアリング結果等	2025年12月から2026年3月にかけて、3名の外部評価委員による外部評価を書面評価にて実施した。評価項目及び評価の観点は自己点検・評価と同一のものをを用いた。 外部評価の結果、応用基礎プログラムについては、学生の講義内容の理解度や学修成果実感が高い点を高評価され、一方、履修者数の増加に向けた取組について学生への更なる周知・広報活動が不可欠との評価をいただいた。なお、応用基礎プログラムについては、外部評価実施時点で完成年度を迎えておらず、プログラムを修了して卒業した学生が輩出されていないことから、進路・活躍状況等の項目については評価不能とされたが、今後の追跡調査等の対応について期待が述べられた。	A